

## パネル発表「生命環境教育の実践」

—保育者に対するニワトリ飼育活動の大切さ—

高桑 進・宮野純次

はじめに

いのちの大切さを学ぶ生命環境教育の一貫として、寒さに強く大変飼いやすい比内鶏の飼育をしてきた、理科教材園に自分達で鶏小屋を建設、二人一組で鶏の世話を毎日するように指導した。最初は餌をドンドン餌箱に入れたり、水の交換を忘れた学生が、次第によく観察をしながら餌や水をやるようになる。生んだ卵は世話をした学生が食べていいことにして、強い動機づけができた。ニワトリを触れない学生も、飼育活動を通して触れるようになる。眼の瞬膜や、脚に鱗があることから恐竜の子孫であると気づかせる。保育士や幼稚園・小学校教諭の養成校で正しい知識を持つ保育者を養成するには、ニワトリの生態をつぶさに観察する飼育活動が不可欠である。

## 1 ニワトリの飼育小屋作り

まずは、ニワトリの飼育小屋を理科教材園の敷地内に作る場所から学生たちと始めた（写真1）。平成15年の春に約2m四方の小屋をたてた。イタチの被害を避けるため、小屋の基礎に深さ約30cmほどの溝を掘りブロックを埋めた。そのブロックの上にニワトリ小屋を作り上げた。小屋の後ろはベニヤ板にした。左右と全面には金網を張り巡らした。この時もイタチの害を防ぐため、金網を地中に20cmは埋めた。少しでも金網が浮き上がらないよう、きちんと10cm間隔で止め上げた。屋根も隙間を作らないようプラスチックのナミ板を重ね合わせて打ち付けた。ドアも工夫して取り付けした。小屋の後ろ側には、ニワトリが休めるように幅が40cmの板を取り付け、産卵用の巣箱を乗せた。この作業を毎週1回行いずつ行い、5週目によく完成した。

## 2 ニワトリのふ化とヒナの飼育

比内鶏の有精卵を、秋田県の大館市に住んでいた知り合いから4月頃に送っていただき、孵卵器を借りた。初めての試みであったが、幸いニワトリの卵の研究者から、色々注意点をお教えいただいた。21日目に孵ったひなを見た学生たちの嬉しそうな顔は忘れられない。ふ化したばかりのヒヨコを目にしたことがない学生がほとんどであるため、大変な騒ぎである。私たち二人の教員が自宅で段ボール箱に入れてヒナを

育て上げた。家族の協力もあり無事に1ヶ月が過ぎて、6月の中旬にはなんとか完成したニワトリ小屋に入れることができた。比内鶏を選んだのは、たまたま知り合いが秋田にいたためであったが、これが後々の飼育で大変よかった。というのは、秋田県は雪国であり、寒さに強いニワトリを飼育することができたからである。

## 3 ニワトリの世話とからだの仕組みを学ぶ

ニワトリの飼育で一番大切なことは、言うまでもなく生きている動物を飼う場合には毎日毎日餌と水を与えなければならないということである。初めてニワトリを飼育する学生たちはこの基本的な点が十分にわからないことが多いことに気づいた。あらかじめニワトリ当番を二人一組で決めて予約表に書き込み、必ずその日に来て餌と水を交換することを説明しておいたが、1週間経って見ると、なんと餌箱に餌が一杯になっているのではないか。箱の中の餌の量を見て、なくなっていたら足せばよいのに関係なくどんどんえさを入れ続けたのである。このような行動が初期の頃よく見られた。その後はきちんと指導したので、現在ではそのようなことはなくなった。水の交換に関しても最初の頃は容器に水を入れていたために、ニワトリがこぼしたりすることが多かったので、自動的に出てくる給水機にした。ニワトリの気持ちになって、きれいな水を飲めるようにするのがいいでしょうと、学生たちには言い聞かせている。ニワトリは餌が古くなりカビが生えると餌を食べなくなるので気をつけるよう指導している（写真2、3）。飼育の世話をした学生は卵を持ち帰り、食べるようにしている。

動いているニワトリはスケッチが難しいので、剥製にしたニワトリやキジなどをみせてスケッチをさせる（写真4）。ニワトリは、脚に鱗があること、眼に瞬膜があり眼を閉じる時は下からまぶたが閉じること、鋭い目つきをしている点から恐竜の子孫だよ、という大抵の学生は驚く。しかし、ニワトリの眼が怖いとか、脚の鱗が嫌い、という学生たちが少しはニワトリというものを進化の観点から理解することができて、嫌いな点を克服するのに役立つことがわかってきた。



#### 4 ニワトリと学生たちの関係について

理科教材園の半分は野菜畑があり、授業するときには小屋からニワトリを放している。すると、学生たちが耕している所に来て、ミミズや虫が飛び出してくるのを素早く食べているのに気づく(写真5)。学生たちが植物観察している間も、ニワトリが見ている風景は微笑ましい(写真6)。ニワトリが嫌いな学生をなくすため、手で捕まえることもやらせている。保育者となった時に、子どもたちに正しい持ち方を教えてほしいからである(写真7)。小学校などでニワトリの飼育は普通に行われているが、突かれたので怖いとか、飼育係でなかったので触ったことがない学生が多い。メスは突かないことや、暖かい感触を感じて、好きになる学生も出てくる。やはり、生き物と親しむ機会を作り出すことが大切である。

#### 5. ニワトリの羽毛を使った作品

ニワトリ小屋を掃除していると、たくさんの羽毛が出てくる。鶏糞は畑の肥料としているが、ある時この羽毛もなんとか使えないかなと閃いたので、学生たちに「この羽毛を使って、何か作品を作ってご覧下さい」と指示したところ、

すばらしい作品が出来上がった。羽毛を無駄にしないで、作品として楽しむ実践も楽しい(写真8, 9)。

おわりに

このようなニワトリ飼育活動を5年間続けてきて、色々なことを学生たちからも教えられた。保育園や幼稚園でも、様々な問題はあるにせよ、生きた動物を飼育することが子どもの発達には大切であることは言うまでもない。経済的格差からくる家庭環境、あるいは保護者の考え方等により、必ずしもすべての子どもたちが生き物を自宅で飼育することができないのが現実である。その意味で、ニワトリは飼いやすく、卵も生むので大変適切な飼育動物ではないかと思われる。自分が世話したニワトリの生んだ卵は格別の味がする。比内鶏はもともと肉鶏であり、通常では手に入らない卵でサイズも大きいので、学生たちは大変喜ぶ。生きたニワトリとふれあう機会がほとんどない現代生活で、保育者となる学生たちに命の大切さを教える生命環境教育の実践として、ニワトリの飼育は大変教育効果があると確信している。

(京都女子大学短期大学部初等教育学科)



写真1 ニワトリ小屋作り



写真2 ニワトリ小屋の掃除 1



写真3 ニワトリ小屋の掃除 2



写真4 剥製で観察



写真5 ニワトリと学生たち 1



写真6 ニワトリと学生たち 2



写真7 ニワトリを持つ学生たち



写真8 羽の作品 1



写真9 羽の作品 2